

春夏秋冬

# 台湾徒然



第59回

## 霧社一九三〇

「史上最大の台湾映画」と銘打って、『セデックバレ』というスペクタクルが台北で公開中である。ヒットメーカー魏徳聖監督がこの映画で取り上げた「霧社事件」は、日本による台湾の植民地支配を象徴する事件にもかかわらず、ほとんど今までドラマの素材になつてこなかつた。企画にのぼつても、往時の集落や生活を再現すること、数千の部隊が展開する戦闘シーンがネットワークとなり、その多くが頓挫してきた。しかし、映像化することのほんとうのむつかしさは、事件のそのものの特異性にあつた。

的に総督が更迭されるという結末を迎えるのだが、いまま微妙な部分が神秘的なベールに包まれたままである。その年は、台南に烏山頭ダムが完成した年でもあつた。同じ年に一方では日本人と台湾人が力を合わせてアジア最大のダムを完成し、他方では、山河を血で染める衝突が引き起こしていったことになる。

「抗日」の象徴として、この事件を取り上げたい思惑は、歴代政権に滞留していた。しかし、殺戮の対象が運動会場の子供や女性だった点に多くの人々がしり込みをした。エンターテイメントムービーは作りやすく、教科書にも取り上げにくい素材だったのである。

往時、霧社<sup>むしや</sup>はもつとも「先進的」な先住民居住地だった。日本人の小学校がおかれ、日本人とセデックと称する先住民は、一見平和的に共存していた。結婚している人もいたし、先住民出身の警察官がすでに採用されていた。こ



慰霊祭に集まった霧社事件の遺族たち(90年代初頭)

の警察官は板挟みとなり、事件後もなく一族を道連れに集団自殺をとげる。こうした物語が、凄惨な事件に深い陰影を与え、日本に多くの霧社事件ファンを生むことになった。

私が初めて霧社を訪れたのは1980年代末、およそ20年余り前のことである。台中から乗り継いだ路

線バスは断崖をえぐぐように登りつめ、ようやく人の頭が見えたところ、そこが狭い意味での「霧社の街」であつた。20年前、事件を直接知る方々がまだ存命であつた。彼らはたまに訪れる日本人に自分たちの遭遇した悲劇を語ることはあつても自ら声高になにかを叫ぶことはなかつたし、平地の漢人が彼らを訪ねることもほとんどなかつた。

当事者は新たに与えられた集落で、ひっそりと「事件後」と「戦後」を生き抜いておられた。しかし、私は、彼らの証言と日本側が残した記録の整合性にいささかの疑問を持たざるをえなかつた。かろうじて生き残つた遺族たちは、日本の統治者の都合に合わせて物語をつくりあげ、訪ねてくる人たちに同じ話をきかせてきたのではなかろうかという疑問がぬぐえないのである。当事者がすべて鬼籍に入られたいま、真実が明らかにされる時代がきたともいえよう。

### 柳本 通彦

やなぎもと・みちひこ  
ノンフィクション作家。著書に『台湾・霧社に生きる』『台湾先住民・山の女たちの聖戦』『タロキ峡谷の閃光』(以上現代書館)、『台湾革命』(集英社新書)、『明治の冒険科学者たち』(新潮新書)など。元日本軍人軍属の最期の声を綴った『台湾戦後65年』(<http://www.taiwanseigo.jp>)を更新中。